

犬は空を飛ぶか

柴田 翔



犬は空を飛ぶか

柴田 翔

犬は空を飛ぶか

一九七六年八月二十日 初版第一刷発行

著者 柴田 翔

発行者 井上 達三

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八
電話 〇三―二九一―七六五一番
振替 東京 六一四一二三

厚徳社印刷 鈴木製本

犬は空を飛ぶか

目次

I

- ウォーターゲート事件と登場人物たちの自由 9
断片のモザイクと人間の夢 26
例外者と正統者と生活者 45
真似する力 58

II

- 小説空間の拡大 69
——戦後派の意味——
居眠り鳥たちと苛立ち鶏たち 80
——戦後の小説についての私的見取図——

Ⅲ

生の構築としての小説 91

犬は空を飛ぶか 103

小説と日常性の偽皮 121

Ⅳ

革命者たちの背理 127

——高橋和巳『邪宗門』試論——

学問の周辺 158

真摯なる深酒 167

虫カン図とソクラテス 171

——小田実『大地と星輝く天の子』またはいい加減さという厄介な事態——

開高健の歩み 183

——「一日の終りに」から「岸辺の祭り」まで——

相対の世界にとどまる決意 193

——真継伸彦『破局の予兆のまえて』のニヒリズムと現実の行為——

芸術意志と共同世界 199

——石牟礼道子『苦海浄土』の方法——

あとがき 210

I

ウォーターゲート事件と登場人物たちの自由

1

先日テレビで、ウォーターゲート事件についてのアメリカ上院の公聴会を見た。上院議員たちに取り囲まれて質問されるのは、事件の際現場にかけた警官、盗聴犯人のひとりであり、事件の背景についての沈黙を破った最初の人間であるマッコード、平警官から財務省取締局の中堅幹部にまで出世し、マッコードを口止めする役割を引受けていたコールフィールドなどの人々であったが、その問いと答えで次第につくり上げられて行く空間は、意外にさわやかに充ちていた。事件自体は陰湿な政治的陰謀であり、公聴会と言っても、事件の隠された背後を明らかにしようとする上院議員たちは検事役であり、証人たちは、一部を除いては、事件に連座していわば被告席に坐っているのだが、そういう立場の相違、ないしは落差、を越えて、そこに登場する人々の関係の一番底に、ある対等感覚、そこからくる自由さというものが感じられたのである。テレビ番組で証人として最初にあらわれたのは、ビルの守衛から通報を受けて現場に駆けつけ、

マッコードら犯人たちを逮捕した三十代半ばぐらいの警官だったが、彼は、質問者に問われるままに、平静に、淡々とその夜の様子を証言して行つた。彼はもちろん、犯人のひとりではないのだから、平静であるのは当然かも知れない。しかし、彼は平巡査であり、質問者は上院議員であり、場所は上院の公聴会である。もしも、同じことが日本の国会で行なわれたらどうなるだろう。多少の偏見をもまじえて言えば、尊大な国会議員の質問ぶりと、しゃっちよこばって答える警官の姿が眼に浮ぶような気がする。

アメリカの上院では、上院議員の方も淡々と、少しも偉ぶらずに質問していた。それは、私に実際に見聞した日本の二、三の国会議員たち、与党野党両方、の尊大さとは全く違うものだったし、また、時折テレビの国会中継などで見る参考人に対する議員たちの、一種のつくられた丁重さ——「自分は尊大な人間ではない、自分は議員であるにもかかわらず普通の人たちにもこの通り丁重に接する立派な人間なのだ」という無意識の意識によって、本来の軽やかさを失って鈍重になった丁重さ——とも本質的に違うものであった。それは、ある共同社会の平等な構成員たちのひとりが、もうひとりの構成員に向つて、先日の事件のことについてたずねている、きわめて普通のたずね方であつた。そして、既に書いたように、たずねられている警官の方も、上院議員のお偉方にものをたずねられてしゃっちよこばっている下っぱのおまわりさんではなく、共同社会のなかで、職分は違ふけれども、やはり同じように大事な仕事をしている人間が、別の職分の人に対して、必要なことを答えている淡々と自由さと普通さを持つていた。

この自由で普通な間柄は、犯人と目される人々が証人として登場しても、少しも変らなかつた。証人台に立ったマッコードの前に、電話機が置かれる。これは線がつながっていない電話機だが、それでひとつ盗聴の實際を説明して呉れるかね、と議員がたずねる。そう、やってみましょうか。だが、こいつは盗聴しても、またこんなところに引っぱり出される破目にはならんでしようなど言いながら、マッコードは電話機を引っくりかえして、装置のつけ方などを説明して行く。犯罪は犯罪であり、有罪であれば当然処罰はされるが、しかし、そのことが身分上の上下、ないしは上下の意識、を生まないものである。

この身分上の上下がないというのが、この公聴会に現われる人たちの間の自由さを一番正確に表わしているかも知れない。身分意識がないことが、人々を対等に、自由にし、社会的身分としてではなく普通の人間として、他律的にではなく自律的に生きて行くことを可能にしている。人々は社会関係によって動かされる函数としてではなく、自らの意志で動いて行く変数として生きている。平警官から財務省の中堅幹部にまで出世し、この事件でその地位を棒にふったコールフィールドの証言は、人生は結局は自律的に生きるほかないこと、自分の行為の結果は自分以外に引受け手はいないことを知った人間の自己認識に支えられていた。

彼は、事件で自分が果した役割について話したあと、自分が間違つた行為だと知りながら、その事件に巻き込まれて行つた過程をふりかえり、自分に言いよかせるように証言して行つた。自分のはかつて警官であり、正しいことのみを行なうように心がけつつ、一步一步今の地位までのぼ

つてきた、まっとうな人間だが、その自分が何故、道をふみはずしたのだろうか。それは、大統領、大統領への忠誠ということだった。大統領のために自分がつくせるということ、それが自分には大切だったのだ。私は、それが不正であることを知っていた。しかし、大統領への忠誠という気持ちがそれを押えた。私は道をふみはずして、スキャンダルに巻き込まれてしまった。正しいことのみを重んじ、まっとうに生きてきた人間であつた私だったのに。

こういうコールフィールドの証言を自律的だというには、幾分の説明が必要かも知れない。大統領への忠誠のために、不正をも犯すというのは、まさに他律的な生き方に違いない。また、半生をふりかえって、自分は警官として正しいことのみを行なってきたという時、その正しさは、規則に外れないという意味、つまり他律的な意味での正しさであらうし、更に、その意味での正しささえ、証言している今のコールフィールドがそう信じているのみで、実際彼がそうであつたか否かは疑わしい。警官から財務省の中堅幹部にまで出世するには、そういう正しさとともに、時折不正に目をつぶる能力をも必要としたであつたらうことは、想像に難くない。あるいは、これによつたら、すべては弁解と彼なりの自己正当化のために言われているのかも知れず、証言台のコールフィールド自身、過去の自分の正しさなど、少しも信じてはいないのかも知れない。だが、そうしたすべての推察にもかかわらず、彼の証言には、人間が終局的には自律的に自己責任において生きるほかにないことを知った人間の自己認識と自由とがあつた。言い訳もし、弁解もし、自己正当化もする。しかし、それにもかかわらず、自分の行為の結果は、結局は負け犬に賭けて

しまったということも含めて、自分で——更に正確に言えば、自分の肉体で——始末するほかにいと知った人間の自由である。

彼の証言における、自己偽瞞、他律性、卑怯さと、自己認識、自律性、自己責任との重層性を、どう説明したら、よいだろうか。それは、存在ないしは行動における他律性と、認識ないしは認識の瞬間における自律性とでも言ったらよいだろうか。

例えば、大統領への忠誠のためにと考えて、あるいはそういうことにして（実は出世のための糸口をつかむために危険を冒したのかも知れない）、マッコード口止めに一役買った時、彼は他律的、自己偽瞞的であった。だが、証言台に立ち、自分の行為をふりかえった時（自分の人生についての否応なしの認識の瞬間が訪れた時）、彼は、他律的自己偽瞞的自分の情性のままに過去をふりかえるのではなく、そういう他律的自己とは別の、内発的な自分として、自分の過去に眼差しを投げかけうるのである。認識の瞬間には、外的諸条件によってつくられ動かされてきた自分とは別の自分が甦り、一瞬のうちに今まで生きてきた自己のすべてを見ようとするのである。本来、自己認識とは、そうした内発的自己の甦りなしには起きえないもの、あるいは、そうした自分の甦りそのものであるのだろう。

そうした自分が甦りうるということ——それはやはりたいへんなことだと、私は感じる。私はテレビを見ていて、あのイントレピッドの四人が脱走した時に発表した単純で淡々とした、しかし見事としか言いようなない声明書を思い出した。財務省の、いささか軽蔑的言辞をろうすれば、

小役人、小悪党が、こういう自己認識を語る自分を持ち、田舎の高校出の何の特別の教養もない若者たちが、何の教養もないままに、しかし自分の行為の理由と内発的な自分の在り様を、あれだけ見事に言葉にすることができのを見ると、アメリカ国民はやはり偉大な国民だと感じないわけには行かない。そして、殆ど反射的に、我が国の宰相田中某氏の、激情と意欲のみほとばしり出て、殆どひとつの文章すら破格とならずに結ばれることのない話しぶりを思い出してしまふ。いや、宰相ばかりではない。こうした事柄でも、一国の国民は自らにふさわしい政府を持つという格言は正しいのだろう。私たちにあっては、イントレピッドの四人のような気取らずまっすぐな文章はもとより、あの財務省の小役人が持ったような自己認識の瞬間が訪れることも、きわめて稀なのである。私たちは、自己認識を強いられた瞬間にも、呼び起こすべき内発的自己認識の核となるべき内発的自分を持たず、なお、過去からの、外的諸条件によってつくられ、決定された他動的自分のままに、自分を見ようとするから、すべては自己弁解に終り、私たちの人生はすべて曖昧模糊とした霧に包まれて、何の手応えもないものになってしまう。

この公聴会にあらわれた人々が持っていた非身分的な対等の感覚、ある種の自由さ、ごく普通に人に対して能力等々は、外的条件によってつくられたのではない内発的自律的自分の存在とともに、みな原因であり、かつ結果なのであろう。そして、それらは、何も警官と国会議員の間だけではなく、また現在の宰相のみならず、なべて私たちの国に一番欠けている特性であらう。互に共同社会の構成員として、身分の上下意識を全く持たずに、ごく普通に話すこと——それが、